

コーパスに基づく日英語の液体メタファー比較

1. はじめに

本研究は、＜コミュニケーション＞・＜感情＞を表すメタファー表現として用いられる液体表現の種類（タイプ頻度）と頻度（トークン頻度）を日・英語で比較し、以下の2点を観察した。1)＜コミュニケーション＞に関する概念を表す表現と共起する液体表現の種類は日・英語で同程度であるが、頻度は日本語の方が多い、2)＜感情＞では、日・英語間で液体表現の使用頻度に大きな違いはない。本発表では、これらの観察から日本語では＜コミュニケーション＞・＜感情＞共に＜液体＞で表現するが、英語では抽象概念毎にどのような概念を用いて表現するかが異なることを主張する。

2. 先行研究

池上は英語の単・複数形の区別は名詞がどの程度明確な輪郭を持つかに関わると主張する（池上 1991, 2000）。例えば、(1)は同じ **apple** だが＜個体＞の形を留めているかで単・複数形の区別をしている。一方、日本語は単・複数を文法的に表現せず、(2)のようにあえて対象物の数を曖昧にして、＜連続＞的に表現する傾向がある。

- (1) Add {a little apple/a few apples} to the salad.
- (2) 切手を{2 枚程/2, 3枚}ください

このような議論を受け、Nomura (1996)は、日本語は＜コミュニケーション＞、＜感情＞等の抽象概念を、連続体スキーマ¹を通して＜液体＞で表現する傾向が高く、英語は＜固体＞で表現する傾向が高いと主張する。また、野村は液体メタファーを以下のサブメタファーに分類する：a. 「言葉話すことは液体を発することである」(<Letting out>)、b. 「言葉の流暢さは液体の流れの速度である」(<Rapidity>)、c. 「言葉の理解しやすさは液体の透明度である」(<Transparency>)、d. 「言葉を聞く/読むことは液体を受け入れることである」(<Absorption>)。

Nomura に対し、辻本 (2004)は、英語も多くの液体表現を＜コミュニケーション＞に拡張して用いると主張し、大石 (2006)は、日本語は＜液体＞以外にも多くの＜固体＞の表現を＜コミュニケーション＞に拡張して用いると主張する。

これらの研究は、メタファー表現の種類を元に考察を行うが、メタファー表現の頻度を元に比較を行った研究はそれほど存在しない。本研究では、コーパスデータを元に「タイプ頻度」だけでなく、「トークン頻度」についても日英語で比較・考察する。

¹Nomura (1996)は、連続体スキーマに基づくメタファー表現を「流動体」(fluid)とする一方で、野村 (2003)は、「液体」としている。本稿は、「液体」「固体」という用語を用いる。

3. 方法

本研究では「現代日本語書き言葉コーパス」(2008 年 10 月版)と、WordBanks Online サブコーパスである ukbooks と usbooks を対象に日英語のメタファー例を収集した。

検索の対象とした検索語と分析に用いた用例数は、日本語が「語」(6329 件)「情報」(2208 件)「感情」(826 件)「怒り」(211 件)「悲しみ」(211 件)の 5 語、英語が word (489 件), information (590 件), emotion (609 件), anger (478 件), sadness (210 件)の 5 語である。得られた例文は、対象とする抽象概念が液体メタファーによって表現されているか、どの液体のサブメタファーで表現されているかという二つの観点から分類した。

4. 結果 I: <コミュニケーション>

<コミュニケーション>の意味を表す液体メタファー表現のタイプ頻度を表 1 に示す。

	<Letting out>	<Rapidity>	<Transparency>	<Taking>	<Others>	総語根数
英語	13	7	0	6	4	30
日本語	15	2	2	10	4	33

表 1<コミュニケーション>を表す<液体>メタファー表現のタイプ頻度²

表 1 の右端の「総語根数」が示すように、<コミュニケーション>に拡張された液体表現は、日本語には 33 種類、英語には 30 種類存在し、<液体>のメタファー表現のタイプ頻度は両言語で大きな違いは見られない。

一方で、液体表現が<コミュニケーション>に関するメタファー表現で用いられた回数(トークン頻度)は表 2 のようになった。

	液体表現	語・情報総語数	確率
日本語	332	8537	3.89%
英語	20	1079	1.85%

表 2<コミュニケーション>に意味拡張される液体表現のトークン頻度

表 2 より、日本語の「語・情報」と<液体>のメタファー表現が共起する割合は 3.89%であり、英語の 1.89%の二倍以上となっている。つまり、タイプ頻度については、辻本の言うように、両言語でほとんど違いがないが、トークン頻度については、両言語で大きな開きがあり、野村の主張を支持することが分かる。

² 分析対象となった「語」「情報」 word, informationは語数が全く異なる。このことが用いられるメタファー表現のタイプ頻度に影響を与える可能性を考え、本研究では、Berkeley FrameNetを参考に考え得る全ての液体表現について、WordBanks Onlineでメタファー表現として用いられているか検討し、データを補強した。

5. 結果 II: <感情>のトークン頻度

<感情>は、各々の語で傾向が大きく異なったため、語毎にトークン頻度の結果を提示する。

「怒り/ anger」			「悲しみ/ sadness」		
	<液体>頻度	母数		<液体>頻度	母数
日本語	9	173	日本語	12	211
英語	23	478	英語	6	210
$(\chi^2_{(1)} = 0.038, n.s.)$			$(\chi^2_{(1)} = 1.891, n.s.)$		

「感情/ emotion」		
	<液体>頻度	母数
日本語	51	826
英語	21	609
$(\chi^2_{(1)} = 4.96, p < .05)$		

表 3 各感情語と共起する<液体>のメタファー表現のトークン頻度

表 3 が示すように、「感情」と emotion が液体メタファー表現と共起する確率は、有意な違いがある。しかし、「怒り」と anger、「悲しみ」と sadness が液体表現と共起する確率には有意差が見られない。

このように、<感情>については、英語も日本語と同様に<連続体>スキーマを用いて理解する傾向が高いと主張される。本研究の結果は、同じ抽象概念でも、全く異なる概念メタファーによって表現される可能性を示した。(1953 文字)

参考文献

- Ikegami, Yoshihiko. 1991. 'DO-language' and 'BECOME-Language': Two contrasting types of linguistic representation. In Ikegami, Yoshihiko (ed.) *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 285-326.
- 池上嘉彦 2000. 『「日本語論」への招待』東京：講談社.
- 大石 亨 2006. 「水のメタファー」再考：コーパスを用いた概念メタファー分析の試み」『JCLA』6, 277-287.
- Omori, Ayako. 2008. Emotion as a huge mass of moving water. *Metaphor and Symbol* 23(2), 130-146.
- 辻本智子 2004. 「英語における導管メタファーの根源領域としての<液体>」『JCLA』4, 253-262.